



野幌森林公園を歩いていると、真白い雪の中につやつやと光沢のある緑の葉が覗いていました。これは「エゾユズリハ」です。

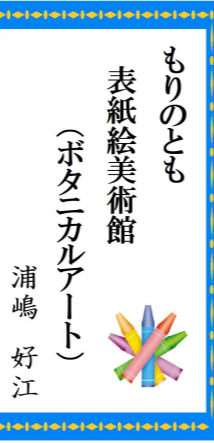
北海道のエゾユズリハは積雪地に対応し、低木で葉の寿命は1〜2年とされ、新葉を含め2〜3世代の葉が同居しているそうです。

本州の暖地のユズリハは、林の中などに生え、背は高く庭木などにして植えられているそうです。

新芽が伸びるまで古い葉が落ちないことから、子孫繁栄の縁起をかつぎ、お正月の松飾に使うこともあるようです。

私達も森に木を植え、育て、子供達に美しい自然を譲っていききたいと思えます。

エゾユズリハ(第34号)



もりのとも

表紙絵美術館

(ボタニカルアート)

浦嶋 好江

学校林・小鳥の村「げんきの森」づくりに参加して

平成27年 第34号掲載

「小鳥の村」は私が相当昔、野鳥観察に熱中していた頃一度おとずれたところで、オオルリの鮮さを今も覚えています。この会に入会したのもこのころがあると言えましょう。そのおよそ30年ぶりに訪れた「小鳥の村」で私の作業分担任は、子どもたちのコースターづくりのお手伝いです。ほかの人たちは、7日の植樹の地ごしらえをする子どもたちの手助けです。植樹前の整地を子どもたちにさせるのは、私のボランティア経験の中ではなかったことです。これは学校方針と小林会長の考えなのでしょう。素晴らしいことです。コースターづくりの丸太の輪切りは、子どもたちは最初上手いきませんでしたが、すぐに上手になりました。子どもたちは覚えるのが早い。

そして7日は当会スタッフの段取りも良く、子どもたちと仲良く、けがもなく楽しい植樹会でした。森に理解のある先生、関心の深い子供たち、藤の沢小学校、駒岡小学校のこういう環境の中で一緒に活動できることを幸せに思います

(中川 成)

北海道医療大学植物園散策

平成30年 第39号掲載

暑くなりそうな強い陽光を受けながら、久しぶりに顔を合わせた18人の賑やかな会話を乗せて1時間ほどで現地に着きました。過去の石狩川流域を農地に改良するため土を提供した里山はその後50年ほど笹に覆われていました。

(私の若い頃、土を入れたバケツを無数にぶら下げたロープウエーが頭上を絶え間なく行き来していた光景を思い出しました)

この地に北海道医療大学が誕生して、堀田先生が11月から雪が積もるまで草刈り機や鋤を使わず剪定鋸で笹の根を浮かせて伐って地面に光が届くようにしたそうです。確かに樹木を切り倒した様子はなく、光の届きそうな場所のササを伐ったのでしょう。種を蒔いたのでもなく何年も笹の下で発芽できる時を忍耐強く待っていた植物たちだそうですね。見慣れていても名前を知らない植物たち、ここでなちゃんと名前と効用を書いた札を付けてもらい嬉しそうに見えました。

(廣瀬 キミ子)



風に香るライラック(35号)

桜の花が散ると入れ変わるように、札幌の大通り公園には、良い香りを漂わせながらライラックの花が咲き始めます。ライラックは英語名で、フランスではリラと呼ばれ、日本名はムラサキハシドイと言います。

花冠の先は通常4裂ですが、中には5裂のもありラッキーライラックといって、これを見つけると幸せになると言われています。

札幌市白石区の川下公園には、およそ200種類のライラックの木があり、1700本ほど植えられていて日本では最大の規模だそうです。

色も白、紫、ピンク、ブルー系とさまざままで花弁は八重咲きもあり、花房が直立するものや、下垂するものもあって変化に富んでいます。

5月中旬から7月上旬まで楽しめますので一度足を運ばれて、良い香りの中を散策されてはいかがでしょうか。



我が家のシンボルツリー(第32号)

我が家の庭に2本のオンコの木が植えられています。18年前、家を建てた時、父が実生から育てた木を頂いてきて植えた記念樹なのです。1層にも満たない木でしたが、今は、2層以上に成長しています。

オンコと言う名前は、北海道独特の呼び名で、イチイとは正一位の位のこと、樹木社会では最高の栄位に当たります。

その昔、いろいろの木で笏(シヤク)を作ったのですが、このイチイで作ったものが一番よいということ、仁徳天皇がこの名前を付けたと言われています。

材は木目が細かく、加工も簡単なので、仏像やお面などいろいろ活用されているようです。また、磨けば磨くほど底光するそうのでイチイで作った基盤は最高級なのだそうですね。

我が家のオンコは、今年も真赤な実をたくさんつけました。この木を見ると今は亡き筒を思い出します。この2本の木が我が家を見守ってくれているようです。

鳥からの贈りもの(第36号)

昨年の11月中旬に札幌の義姉の家へ行った時のことです。庭を見ると1.5メートル位の木に澄赤色の実がたくさんついているのが見えました。何の木か義姉に聞いても植えた覚えがないといいます。1枝いただいてきて図鑑で調べると「マサキ」という木で、高さが3〜5メートルになる常緑樹とのこと。葉は光沢があり、少し、厚みがあります。その枝を花びんにさしていたのですが、いつまでも青々とした葉で、翌年の春には新芽が始め、5月中旬には淡緑色の7ミリ位の花が咲きました。

澄赤色の種皮に包まれて薄皮をむくと、真白い種が出てきました。何年位であのきれいな実がなる木になるのか楽しみです。

鳥が運んできたのでしょうか。図鑑では道南でないと育たないと書かれてありましたが、これも温暖化の影響でしょうか。



すみれの花(第33号)

植物画展を見ての帰り、あるお茶屋さんの前を通りかかると、ご自由にお持ちくださいとのはり紙の側に小さなポットに数種類のお花が植えられていました。スミレの花が可愛らしくて、お店の方にお断りして持ち帰り、我が家に植えました。その後、春になると毎年庭のあちこちから芽を出して可愛い花を咲かせ、私たちを楽しませてくれます。堇(すみれ)は花の形が、大道具の墨つぼに似ているところから「墨入れ」→「スミレ」となったそうです。スミレの種は、はじけて跳ぶので、跳んだ所で発芽すると思っていました。種の周りに白くて小さい粉がついていて、アリがそれを巣に運び、そこで食べるので巣の中で発芽するのだそうです。植物っていろいろな方法で子孫を残そうとしているんですね。アリに種を運ばせて、遠くまで広げようとしているなんて、面白いですね。ちなみに、この絵のスミレは葉の形から、「トリアシスミレ」というのだそうです。



表紙絵に寄せて(第37号)



札幌森友会に入会させていただき、山へ行くようになってから、山道の脇に咲く花々に興味を持つようになりました。会員の中に、植物に詳しい方がいらして、花に目が留まると「これは何々ですよ」と教えてくださいます。自分でも植物図鑑を用意して山で見た草花を、家に帰ってから記憶に照らし調べて、花の名前を知らなくなりました。

花の名前を知ると、絵に描いてみたくなりました。そんな時、偶然目にしたのがボタニカルアートと言って、植物を忠実に描いた絵でした。早速、教室に入り習うようになり、注意してみますと、家の周りや空き地にも小さな花々が咲き、子供の頃に「ままと遊びに使ったり、首飾りを作ったり、色水遊びをした花もありました。

一輪の花を描いてみますと、その花の色や形、種のつき方や子孫を増やす為の仕組みなど、本当によくできていると感心させられました。なかなか実物のように描けません。これからも身近な花々を描いていきたいと思えます。